

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12511

研究課題名（和文） 辺境コミュニティの排除と包摂 紛争後コロンビアにおける社会的主体の創生

研究課題名（英文） Exclusion and inclusion of the marginalized communities-Creation of social agency in the post conflict Colombia

研究代表者

幡谷 則子（HATAYA, NORIKO）

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：00338435

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：2019年は本研究事業の海外研究協力者となるDavid Burbano教授（教皇立八ベリアナ大学）が日本に3か月滞在した機会に、両国間の辺境の比較理解の意味から、日本国内の里山里海の事例を訪問調査し、コロンビアではナリーニョ県トゥマコ市の実態調査にも同行した。2020年度と2021年度はコロナ禍の影響により、国内外の移動を伴う調査は中断せざるを得なかったが、事例とその歴史的背景に関する文献調査に力を入れ、活発なオンライン研究会を行った。2022年度以降はコロンビアへのフォローアップ調査を再開したほか日本ラテンアメリカ学会でパネル報告し、最終報告書を執筆した。2024年6月に刊行予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

南米コロンビアを舞台に、「辺境」の形成過程とその実態を、複数の事例研究をもとに、個々の歴史的背景も踏まえて明かにした。この研究を通じて、政府と反政府武装勢力との和平合意後も、紛争地においては辺境コミュニティが可視性を獲得しつつも、新しい暴力や排除の対象となる可能性が生まれる現実があり、それらの相克の実態と原因、背景を分析することが、紛争後の辺境地域の主体的再生の可能性と課題を明らかにすることができることを示した。コロンビアの現状の分析は、地域や大陸を超えて、紛争や開発の矛盾を抱える地域の理解と問題解決（日本国内の過疎地域や被災地域の再建も含めて）を考えるためにも有益である。

研究成果の概要（英文）：In 2019, Professor David Burbano (Pontifical Javeriana University, Colombia), our overseas research collaborator, came to Japan hosted by Sophia University for three months research on Satoyama and Satoumi in order to gain a comparative understanding of the peripheral communities between the two countries. We visited together different case villages in Japan and also to Tumaco City, Narino Department in Colombia. In 2020 and 2021, due to the effects of the coronavirus pandemic, we had to suspend our fieldwork, which required mobility, but instead, we focused on literature survey on cases and their historical background, through active online study sessions. From 2022 onwards, we resumed follow-up research in Colombia, organized a panel session at the yearly congress of Japanese Association of Latin American Studies in June 2022. Through 2023 we concentrated in writing up our final report as our outcome of four-year research project, which is scheduled to be published in June 2024.

研究分野：ラテンアメリカ地域研究および社会学、人文地理学

キーワード：コロンビア 辺境 和平構築 紛争 コミュニティ運動 エスニック・マイノリティ 国内避難民 テ
リトリ-

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、南米コロンビアにおいて、長年の紛争と構造的暴力によって日常生活を剥奪されてきた人々が、紛争後社会において、尊厳ある暮らしを再建しようとする営みを、市民による抵抗と生存戦略の実践、国家の政策と支援、地域経済に関わる市場と開発事業という3次元の動態とそれらの相互関係を通じて分析するものである。同国で起こった20世紀半ばの内戦とその後形成された主要な非合法武装組織の展開を紐解きつつ、21世紀にかけて紛争被害が激化した「辺境」(注:本研究では歴史的に政府の統治が弱く行政サービスの受給が行き届かない地域、ないしは政府からその存在すら認識されずに排除されてきた地域と定義する)で息づいた民衆史を比較考察する。各地域で育まれた連帯と協働の民衆組織や、そこから派生するオルタナティブな活動が、コミュニティの社会主体としての創生を促す過程を実証分析する。「辺境」にある民衆の生活実践を通して、地域社会からみたコロンビアの社会史がどのように描かれ、また今日の和平構築における課題と展望をどのように理解するべきかを明らかにする。

(2) 研究代表者(幡谷)は、2006年以降、コロンビアの紛争地における土地と生活圏を守る農民の抵抗運動に注目し、そこから派生する生存戦略の経済活動を分析した。しかしこれらの活動の持続性は検証されず、農村部の経済自立化にはローカルな主体性に基づく発展モデルの構築が不可欠であると結論づけた。土地収奪を伴い、農民や零細鉱山業者を賃金労働者化する暴力的な鉱業・農業の開発が辺境の生活領域を脅かす現状の分析を通して、民衆の生活実践は、新採取主義経済モデルに対する日常の抵抗であることを確信した。2016年に締結された和平合意の骨子には、農村部の統合的開発が掲げられたが、コミュニティが社会的主体となる紛争後の開発の道筋はみえてこない。一方で、かつて農村コミュニティが挑戦し、頓挫した経済活動の中から再生し、新しい生産と消費のしくみをめざす事例もある。多様なコミュニティの実践と困難を前に、様々な辺境地のオルタナティブな経済活動を、社会史に位置付けて比較分析を行う必要性を見出し、本研究課題を着想するに至った。

(3) 研究分担者の千代勇一(帝京大学)は、コロンビアで違法作物とされているコカ(麻薬コカインの主原料)栽培農民の研究の過程で、コカが「辺境」における現金収入の必要性から入植者たちによって広く栽培されてきたことを明らかにした。政府は非合法武装組織の資金源としてのコカを取り締ると同時に、「辺境」において新たなアグリビジネスの開発を行うため様々な違法作物対策を行ってきたが根本的な解決には至っていない。違法作物対策と農村の統合的開発はFARCとの和平合意における骨子の一つであったが、従来のような政府が主導する形ではなく、住民が主体的に経済活動を推進する新しい経済活動が模索されている。辺境における社会的主体の形成と今後の可能性という視点は、辺境ラ・グアヒラにおける開発と先住民社会の軋轢という点から、グローバル化社会における先住民の生業の可能性を問う研究協力者松丸進(上智大学大学院)の視点とも交差する。多様な「辺境」における社会的主体が創生される動態の比較を通して、辺境から政治社会史理解の新しい枠組みの構築がめざされた。

(4) コロンビアの和平プロセスに関する研究は、国際政治学や歴史研究の分野で紛争の発生要因を論ずるものや、和平政策を分析するものなど、膨大な先行研究がある。社会運動論では、地域別の紛争と抵抗運動に関する研究の蓄積がある。本研究は、辺境の紛争被害地の生活史に焦点を当てることで、地域研究の立場からコロンビアの和平プロセスを理解しようとする立場をとる。社会構造、政府、市場の関係において地域別に比較分析し、和平合意後という共通の同時代性を分析軸に加える包括的な考察は、まだ少ない。他方で鉱山村、先住民共同体、違法作物栽培農家に関する研究は多数あるが、これらの人々が住む地域を国家から排除されてきた辺境として位置づけ、その特徴を論じた研究はごく限られていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、コロンビアの辺境に住む人々が、紛争後に政府の開発政策に統合されることによって、これまで伝統的に営まれてきた活動の基盤である土地や生産様式が再び脅かされるなどの権利剥奪の負のスパイラルに陥らず、日常生活と生業を回復し、社会的主体として創生され得るか否かを検証することにあった。

(2) 政府からも市場からも不可視の状態にあった辺境コミュニティは、常態化された社会的排除に抵抗してきた。国民統合と市場メカニズムに立脚した経済開発モデルへの統合によって、新たな排除が生まれることを立証すると同時に、コミュニティのイニシアティブこそが国民和解につながる和平構築の担い手であることの提示をめざした。

3. 研究の方法

(1)本研究では、以下を中心命題として、事例研究を通じてその解明を試みた。 辺境コミュニティの日常の抵抗の生活実践の当該地域の政治経済的文脈にける再構築：コロンビア辺境コミュニティの抵抗と生存のための活動を、経済社会史において捉え直した。具合的には、1)マグダレナ川中流域(違法作物栽培地域) 2)チョコ県(アフロ系住民集落) 3)ナリーニョ県(トゥマコ行政市) 4)ラ・グアヒラ県(ワユ先住民族集落)を対象とした。今日の和平政策と開発政策がもたらす辺境地域における統合または排除の動態の考察：辺境地域における、FARC との和平合意後の和平政策と開発戦略の展開を把握し、紛争後の辺境地域における国家 市場 市民社会の関係にも注目した。市場・国家・市民社会間関係におけるイノベーションがもつ現代的意義の検討：コロンビアの辺境コミュニティに基軸を置いた社会経済史の比較分析によって、為政者の立場から綴った公的な歴史とは異なる歴史観の提示を行う。

(2)以上の研究課題に対し、具体的な地域と事例分析を通じて実証研究を行った。代表者幡谷はチョコ県のアフロ系住民コミュニティの集合的土地復権運動と生存戦略を、分担者千代は、マグダレナ川中流域における入植者コミュニティの違法作物栽培と代替開発、紛争アクターとの間のコンフリクトの分析を行った。このほか、ナリーニョ県辺境の先住民アワ民族コミュニティの生活圏を守る運動を追う柴田大輔(フォトジャーナリスト)の報告や、ラ・グアヒラ県の先住民ワジュ族がおかれた社会経済的搾取構造と開発の問題を研究する松丸 進、トゥマコの地方政治を考察する柴田修子(同志社大学) 国内避難民(IDP)問題を研究する近藤宏(神奈川大学)などの研究協力者の報告からも知見を得た。

(3)具体的な研究方法は、一次資料の文字化； 文献・資料収集； コロンビアの事例研究対象コミュニティにおける現地調査の実施； 国内外での成果発表とそれを通じた調査地および一般社会への還元； 毎年平均3~5回の国内研究会の開催； 日本の辺境コミュニティの事例調査の実施であった。

4. 研究成果

(1)2019年度は、国内研究会を対面で6回実施し、海外研究協力者のDavid Burbano教授(教皇立ハベリアナ大学)の訪日に合わせて、日本国内の「辺境」地域事例として、千葉県南房総・鴨川市、埼玉県小川町、陸前高田市の訪問調査を実施し、日本の里山里海保全活動と、コロンビアの辺境地域でのオルタナティブな経済活動との比較の視点を養った。同年は8月に幡谷がナリーニョ県トゥマコ、チョコ県キブドーを含むコロンビアでのフィールド調査を実施した。

(2)2020年度と2021年度はコロナ禍で移動や対面の研究会の開催ができず、オンライン勉強会方式に切り替え、年に数回の研究会を実施し、事例研究対象地域の歴史の文献渉猟が研究報告書作成には有意義であった。

(3)2022年度より徐々に対面での活動が再開できるようになり、6月の日本ラテンアメリカ学会大会にて、本研究事業の中間報告をパネルとして実施した(代表者幡谷、分担者千代、研究協力者近藤、柴田が参加)。また、当初より、本研究事業の中心命題と関連性が高く、反グローバリゼーションの社会運動論、開発と環境の問題に取り組む人類学者、Arturo Escobar教授(ノースカロライナ大学)の招聘を企画していたが、オンライン特別セッションとして実現できたことは大変有意義であった。同年8月、幡谷はキブドーとカリを中心にコロンビアへのフォローアップ調査を実施した。2023年度は最終報告書のとりまとめに注力し、幡谷は引き続きコロンビアで複数の辺境地域でのフィールド調査を実施した。

(4)2024年6月『辺境からみるコロンビア』として刊行予定(上智大学出版)の同上最終報告書は、序章、終章ほか7章から構成されている。序章と第1章で、コロンビアにおける「辺境」概念を多層的に定義し、第1章で、「辺境」地域としてとらえられる地域を概観した。第2章から第7章までは、マグダレナ・メディオ(マグダレナ川中流域)のコカ栽培農民、ラ・グアヒラのワユ先住民族と開発の軋轢、チョコ県におけるアフロ系コミュニティの生業と開発、紛争にあるコンフリクト、ナリーニョ県トゥマコの地方政治と都市周辺部における生存戦略、IDPの周辺性にみられる二重性などの事例研究である。

終章では、本書を通じて明かにされた辺境の特質として、以下の3点をあげた。

辺境は人為的に創られてきたものであること。「辺境」の決定要因の一つは地理的条件に置かれてきたが、その地理的条件でさえ、そのとき、その状況に応じて、「中心」や「拠点」となり得るのであり、辺境は近代国家形成期における国境や行政区分の線引きによって人為的に定められてきた。問題は、中央政府 vs 辺境という関係を保ちながら、辺境が開発拠点とされると、開発拠点としての中央からの働きかけにより、辺境の可視性は高まるが、その土地、コミュニティ、自然環境、文化に対する評価は、必ずしもそこに住んできた人びとのそれとは一致しない点にある。開発拠点として寄せられる関心は、その土地、資源、環境(例えば風や河川)とそれらの開発・採取にあり、地域と共生の関係を育んでいた人びとと彼らの価値観ではないことが事例により明らかになった。

辺境は動き、再生されること。支配、植民地行政、独立、国境をめぐる関係、国内紛争、行政区分の変化などによって、辺境は人為的に創造され続けることはすでに明らかになった。加えて、人びとの移動、モービリティによって辺境が新たに形作られる。移民、難民、IDPの移動パターンの多様化によって、時代とともに 辺境における集住過程も変遷し続ける。

辺境は自然との共生を育み、広域とつながるポテンシャルをもつこと。各事例では、辺境ならではの厳しい地理的条件が、自然との共生 や、さらなる広域とつながる可能性があることが示された。

最後に、本研究プロジェクトを通じて得た「辺境アプローチの意義」について、以下の2点を指摘して締めくくりたい。

(1) 辺境に生きる人びとの知恵と思想、価値に対する評価：脱辺境化を試みて再び排外や周縁化の力を受けてしまった事例は見られたものの、その過程において辺境に生きる人びとの知恵や、考え方、そして自然との共生や近隣との連帯の行動とその価値など、中央権力が今もって大きな価値を見出していなくとも、彼らの生存戦略と辺境において生活し続けるための力を与えるものとして認識することができた。「辺境」に息づく暮らし、人間と自然との関係に目を向けることは、辺境を開発の対象、あるいは違法作物・違法経済の流通ルート、軍事行動の戦略的ルートとみなす視点からは認識されない、辺境テリトリーの価値を再評価 することにつながる。

(2) 辺境への視座に内在する限界や矛盾への気づき：辺境からコロンビアを見る、と銘打って研究してきたが、国家（中央）vs 辺境（周辺）という捉え方そのものに限界があるのではないかという問いが新たに生まれた。同時に、コロンビアの辺境へのアプローチは、他地域にも通底する問題への認識を新たにさせた。「辺境」での抵抗の日常性、営みについて、オルタナティブな社会や関係性を構築する可能性があるのではないかと、という関心から考察することは、それを実現する環境や条件をどのように整えるべきか、そしてその状況にどのように接するかという点の意識化につながったといえる。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 幡谷則子	4. 巻 2022年10月号
2. 論文標題 左派新政権誕生のコロンビアー歴史の変革の実現なるか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 113-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 千代勇一	4. 巻 66(1)
2. 論文標題 コロンビア初の左派政権誕生の背景と今後の展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ時報	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 千代勇一	4. 巻 1436
2. 論文標題 “紛争後”のコロンビアにおける抗議活動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ時報	6. 最初と最後の頁 46-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 千代勇一	4. 巻 896
2. 論文標題 違法作物栽培からの脱却 コロンビアにおける農民の奮闘	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青淵	6. 最初と最後の頁 14-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 幡谷則子	4. 巻 42(3)
2. 論文標題 ラテンアメリカの連帯経済 - コロンビアの事例を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 農村計画学会誌	6. 最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 幡谷則子	4. 巻 100
2. 論文標題 ラテンアメリカにおける連帯経済：可能性と挑戦-コロンビアの事例を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 生協総研レポート	6. 最初と最後の頁 2-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Noriko Hataya
2. 発表標題 Community resistance in the marginalized territories: Revisited in the light of colonization and national strategies for global market in Colombia
3. 学会等名 Congress of the Latin American Studies Association (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 幡谷則子
2. 発表標題 辺境の歴史から見直す飛び地経済の形成と収奪
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会第43回定期大会 (同志社大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 幡谷則子
2. 発表標題 コロンビアの左派政権誕生と21世紀の民衆社会運動
3. 学会等名 ラテン・アメリカ政経学会第59回全国大会（神戸大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 千代勇一
2. 発表標題 コロンビアの辺境地域における麻薬問題の過去と現在
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会第43回定期大会（同志社大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 千代勇一
2. 発表標題 再びの左旋回 2020年代のラテンアメリカ政治:180度転回するコロンビア
3. 学会等名 ラテン・アメリカ政経学会第59回全国大会（神戸大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 幡谷則子
2. 発表標題 「コロンビア：和平合意後に深まる社会の分断」シンポジウム「市民が求める国家像 政治不信下のラテンアメリカを展望する」
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Noriko Hataya
2. 発表標題 Panorama de la Economía Solidaria en America Latina
3. 学会等名 “La reciprocidad y los colectivos de auto-organizacion de la vida comun” Encuentro de Florianopolis (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Noriko Hataya
2. 発表標題 Economía solidaria en America Latina en busca del cambio paradigmático
3. 学会等名 II Congreso Internacinoal de Ciencias Economicas Administrativas (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Noriko Hataya
2. 発表標題 Local Initiatives as Solidarity Economy: Mutual Learning between Colombia and Japan
3. 学会等名 The Dynamics of the International Manifesto for the Solidarity Economy, organized by RIPESS Europe (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Yuichi Sendai, (Yusuke Murakami y Enrique Peruzzotti(eds.))	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Universidad Veracruzana	5. 総ページ数 425
3. 書名 America Latina en la encrucijada: coyunturas ciclicas y cambios politicos recientes (2010-2020),	

1. 著者名 畑恵子、浦部浩之（編著）千代勇一他著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 328
3. 書名 ラテンアメリカー地球規模課題の実践	

1. 著者名 幡谷則子（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 上智大学出版	5. 総ページ数 329
3. 書名 ラテンアメリカの連帯経済 コモン・グッドの再生をめざして	

1. 著者名 岡本哲史・小池洋一（編）幡谷則子ほか著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 522
3. 書名 経済学のパラレルワールド 入門・異端派総合アプローチ	

1. 著者名 Esteves, Ana Margarida, Thomas Henfrey, Luciane Lucas dos Santos and Leonardo Leal (eds.), Noriko Hataya (with Miguel Fajardo Rojas) et al.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 233
3. 書名 Solidarity Economy: Alternative Spaces, Power and Politics	

1. 著者名 ギボ・ルシーラ / 谷 洋之 (編) 幡谷則子ほか著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 上智大学イベロアメリカ研究所	5. 総ページ数 95
3. 書名 ラテンアメリカにおける人の移動 - 移動の理由、特性、影響の探求 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	千代 勇一 (Sendai Yuichi) (90806382)	帝京大学・外国語学部・准教授 (32643)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------